

豆句集



その八粒目
2016 年立夏号

目次

*俳句

大人の頃 鈴木光影 …2

夏の空色 梅津志保 …4

樹は揺れよ 井上雪子 …6

静かなかたち 吉野裕之 …10

*エッセイ

身体として在る時間

直線を引くということ 鈴木光影 …13

ヨガという空間 梅津志保 …14

水に浮かべて 井上雪子 …15

*メッセージ …16

豆句集

豆句集 みつまめ
2016年立夏号(通巻第8号)



みつ
まめ

大人の頃

鈴木光影

蚯蚓焼かれていても跨いで出社せよ

怖ろしく神社の百合の匂ひけり

汗流れ流れて海に着くことも

涼しさや日本里山コレクション

かき氷こどもは大人の頃もたぬ

あつすぎて街寂寂となりけり

海月漂ふ我は電車で詰めらるる

H D D 回せ飛んでけ夏休み

蛍火の猛く点りて猛く消ゆ

鳴らすたび三線夏の海を呼ぶ

夏の空色
梅津志保

菜箸は短くなりて春キャベツ

進級の子らは背の順チューリップ

鍵預け黄金週間はじまれり

廃校に声の無きこと藤の花

背伸びしてポストに届く夏帽子

縁側に祭太鼓や天日干し

ウクレレや開店の音梅雨夕焼け

短冊を結び直すや警備員

ゆったりと西瓜切り分け父の家

パレットに夏の空色生まれけり

樹は揺れよ

井上雪子

♪

蜜蜂にさよなら晴れてよかつたね

燕来てましてろの胸をまるく張る

サクランボはじまりらしき光かな

六月や猫が歌ふも肯へり

熊の住むとことはかと訊くこどもかな

雨脚の白さや飛び立ちかねてをり

まつさらな手足に夏至のひと日かな

夏野の樹ひとりづつ来る子と揺れる

思ひきり笑へ！浮き輪に水ひかり

♪

青梅雨やあとさき一気に霞みけり
見るたびに梅花空木は清々し
安堵してすぐに寂しさ青トマト
辛うじて文字よさらさら粉寒天
向日葵とステテコ過ぎていつた雲

♪

夕焼けや橋でやうやく眼を放つ
立ち食ひのざる蕎麦しのぎ凌ぎゆく
泣きたさや今は銀河の真下かな
越へて来て背を抱ひてをり広島に

静かなかたち

吉野裕之

二の谷に魚屋あつて梅白し

うぐひすの声の粒々降つて来る

少年の顔に擦り傷山笑ふ

ふはふはと卵の上の春の空

母に会ひ父には会はぬ躑躅かな

苗札をいくつか立てて小さな手

アマリリス靴に羽あることもあり

梅雨晴れのホテイアオイのこつこつと

マンゴーの静かなかたち私に

梅雨明けの近づく街のパセリかな

身体として在る時間

鈴木光影十梅津志保十井上雪子

五・七・五という限定された空間にこめられる、大きく豊かな時間。

俳句の力において、「(素の)身体としてある」という素朴な感覚は、とても大切なものだという気がしています。

けれども、社会的な属性からすっぱり離れ、

生物的な身体として在るということは、

実は難しい事だとも思います。

今号は、身体感覚という視点から自分自身を捉え、

俳句の力の基本を見つめました。

●直線を引くということ◎鈴木光影

数年前から通う書道教室で私が最初に書いた字は、漢数字の一だった。一は、多くの漢字の構成要素となる「横棒」でもあるので、基本中の基本だ。しかしそれが難しい。水平な、真つ直ぐの線が良いかというところも違う。それが数カ月練習するうちに、身体感覚として会得されたように思った。腕の延長としての筆先が半紙と触れ、筆を引っ張ると紙の抵抗を感じる。そして迷いなく筆が引かれた時、白い半紙の上に生き生きとした美しい直線が現れる。書かれた線を美しいと感じるのは、目で見て初めて思うので

はなく、書いている体で感じている気もする。良い直線は、そこに人間の存在を感じる。それは幾何学的な直線の美しさとは質的に異なる。

話は変わるが、今春、宮城県南三陸町を訪れた。東日本大震災の津波で激甚な被害に遭った港町である。震災から五年が過ぎた現在も、かさ上げのため盛り土の工事が進行中だった。盛り土の上部は重機で均され、幾何学的な直線を描いていた。震災前は町のどこからでも海を眺められたが、現在は小高い盛り土に囲まれてしまつてそれは叶わない。見えない海の方角を見遣ると、盛り土の直線が春の空をくつきりと切り取っていた。

●ヨガという空間◎梅津志保

ヨガを始めて一年余り。ヨガで大切なのはゆっくり呼吸すること、体のどこを伸ばしているのかを意識し、自分にむきあう時間をつくることだという。ものごととのスピードが早くなつていく日本の暮らし、ヨガ人口百万人以上という数字にひとり納得しながら、ヨガの空間は私にとつては忙しさをリセットする空間なのだと思う。ヨガを始めたばかりの時は、自分の呼吸の速さに驚いた。会社や家で鼻息を荒くしていた自分を反省した。きつとそれは周りの人にもいい影響は与えなかつただろう。

ヨガのポーズは、自然に即したものが多し。「山のポーズ」は、自分が山になつたかのように体の中心を見つけ、どっしりと立つ。「木のポーズ」は、足をしっかりと地につけ、養分を吸い上げるようにまつすぐに立つ。自分が山や木になつたつもりになる。考えてみるとそれはすごい体験だ。動作を繰り返すことで、身につき、自然と自分が一体化していくのかもしれない。仕事の帰り道、大きく茂つた桜の木の根元に目が行く。根元からどどんと養分を吸い上げていることを想像し、俳句を想う。私も地に足つけて生きているよ、一緒だね。俳句とヨガ、相互作用が私を支える。

●水に浮かべて◎井上雪子

月に二回がやつのだが、プールに行き、二十五メートルをていねいに泳ぐ。水に浮かんで脱力、身体の左右のバランスを確かめ、おへその辺りに意識を置き、なるべく呼吸をしないでクロール。水音も立えないように。二十五メートルごとに、プールの壁に背中をくつつけて、長く息を吐き、長く息を吸い、また水に浮く。そんな変わったことをしていると、二十二分間という水中無呼吸の世界記録の驚異的な長さだが、思考や感情を手放した、生れる前の状態に近いであろうことを実感できたりする。何かが気になつたりした途

端、呼吸はふいに苦しくなるのだ。速い泳者の多くは、力まず、乱れず、無駄のないリズム。他方、幼い子どもがひらひらと泳ぐ自由で無心の美しさ。ともに、身体は無思考にゆだねられて楽しそうに見える。残念ながら、私のような中途半端な大人や小学生にはこの楽しさ、うな感じがない。ひとは目標に助けられ、見栄に邪魔され、比較し考え、迷い苦しむが、その姿を映す鏡は見えにくい。相対や比較を越えた「絶対」、最初からいましたという顔の「直感」、考えない身体になつてたどり着くだろうその場所まで、今しばらくはていねいに、水に浮かべて行こうと思う。

●

「豆句集 みつまめ」、
小誌は文字どおり小さな船ですが、
ようやく八粒目となりました。
今号には思いがけなく、
新しい仲間が「やあ」と乗り組み、
ぐいと漕ぎ出しました。

俳句という大きな力、詩の言葉の力、
その深さは、楽しいことを楽しい方へ、
あるいはまた、苦しいことも悲しみも憤りも、
まっすぐに受けとめ、
日々のありのままを見つめ、
いつでも新しい光であろうとする。

「豆句集 みつまめ」という小さな船に
乗り組んだ私たちも、
さらなる探検に漕ぎ出したいと思います。

豆句集



豆句集 みつまめ

井上雪子

梅津志保

鈴木光影

Producer * 吉野裕之

このファイルはホームページ配布版のため、
奥付の内容が印刷版のものとは異なります。



豆句集 みつまめ

2016 年立夏号（通巻第 8 号）

2016 年 5 月 5 日発行

発行所

みつまめ工房

website >> <http://homepage3.nifty.com/a-un/mitsumame/>

blog >> <http://819mitsumame.blogspot.jp/>

制作：アトリエ云 印刷：啓文社

定価：300 円（税別）